

先週の礼拝メッセージ(2023年10月15日) ベン牧師

「主を畏れる喜び」 イザヤ書 11:1-5

今日の箇所は、メシアがどのようなお方としてこの世にお生まれになるかを預言しているところです。

「エッセイの株から一つの芽が萌え出でその根から若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。知恵と分別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れる霊。」(1節)

この預言どおりに、ダビデの家系からイエス様はお生まれになりました。イエス様の上には主の霊がとどまるとあります。どのような霊かということが記されていますが、その最後は「(主を)畏れる霊」であることに目を止めたいと思います。漢字が「恐れる」ではなく「畏れる」が使われています。「恐」は怖いという意味合いですが、「畏」は畏れ敬うという意味で使われます。しかも、3節では「畏れる霊」を引き継ぎ、「彼は主を畏れることを喜び。」と続いています。

この「喜び」は、やったーという感情的な喜びではなく、直訳すると「匂いを嗅ぐ」となります。当時は神殿での礼拝時に香が焚かれていました。人々はその匂いが立ちこめる中で、神の臨在に触れ礼拝を捧げたのです。そしてその匂いは、神殿に満ちていました。そういう意味で、「匂いを嗅ぐ」という言葉が、喜び、満たされる(新共同訳)というふうに訳されたのだと思います。つまりイエス様は、メシアとして歩む中、香が部屋に満ちているようにいついかなる時も、主を畏れる喜びに浸る歩みをされると言っているのです。

さて、私たちクリスチャンがその人生で目指すべきはなんでしょう。この世の成功や安泰でしょうか。決してそうであってはなりません。私たちが目指すべきはキリストに似た者となることです。だとすれば、私たちも日常において、主を畏れることを喜びとするものとなりたく願うのは当然ではないでしょうか。イエス様は父なる神を畏れる歩みを全うされたお方です。人々から人気を博している時でも、命を狙われている時でも、そして、弟子に裏切られ、捕えられ、人々の罵りの声の中、十字架につけら

れた時でも、どんな時であっても、全てを父なる神様に委ね、神のみこころになることを喜びとされたのです。その姿は、実はクリスチャンが目指すべき姿なのです。

しかし私たちは人間ですから、弱さをたくさん持っていますし、失敗や落ち込みもします。しかしみ言葉はこう言います。

「私たちが真実でなくても、この方(イエスキリスト)は常に真実であられる。」(Ⅱテモテ 2:13)

私たちがどうであれ、イエス様は常に変わらず私たちを愛し、導き、助けてくださるお方なのです。だからこそ、私たちはイエス様が大好きですし、イエス様のようになりたいと願うのです。もちろん、クリスチャンとしてこの世を歩むという人生は、決して平坦なものではありません。日本でクリスチャンとなるということには、ある意味覚悟は必要でしょう。

「私に付いて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい。」(マタイ 16:24) とイエス様はおっしゃいました。

イエス様に委ね、信頼して従うという覚悟です。しかし決してそれは重荷ではありません。ではイエス様に従うことが喜びとなるためにはどうしたらいいでしょう。答えは一つです。私たちが聖霊に満たされることです。決して自分の頑張りや知恵だけでは従うことはできませんし、一時的にはできても長続きはしません。

私たちがイエス様のもとに行くのは、イエス様に似た者となるためです。もっとイエス様を知りたい、イエス様のみこころを求めたい、そういう思いによってイエス様のもとに行くなら、主はその思いを喜んでくださり、祝福を注いでくださいます。私たち一人ひとりが主を畏れる喜びに満たされるなら、それはまさに、主を喜び主に喜ばれる教会という、私たちの教会のビジョンが実現する時ではないでしょうか。